

# ヒンドゥーの宗教世界

—不二元論派学匠マドゥスーダナ・サラス

ヴァティーのバクティ観をめぐって—

日野紹運

## 1. 1

前稿「ヒンドゥーの宗教世界——ヴェーダーンタ学匠の教説をめぐって——」<sup>(1)</sup>において、筆者は「ヒンドゥー教」という言葉によって包摂されているヒンドゥーの多様な宗教世界を構造的に理解しようと試みた。その際、宗教の基本的構造というべきものを聖なるものと俗なるものと二分的宗教世界に求めた。この聖なるものと俗なるものという二つの領域および俗なるものの聖なるものを求めての宗教実践、即ち俗なるものの救済のための手段の三者は宗教によってさまざまな在り方を示し、それぞれの名称によって呼ばれているのである。そこで聖なるものと俗なるものの在り方に従って器型と道具型の二類型に分類し、それに基づいてヴェーダーンタを代表する三学匠であるシャンカラ、ラーマヌジャおよびマドヴァの教説について考察したのである。

シャンカラ（あるいはサーンクヤ）に代表される器型宗教は知識（グノーシス）を救済手段として非人格的な聖なるものであるブラフマン（あるいはブルジャ）に自ら成ろうとする、いわゆる知即成の主知主義的救済論を説いた。一方、道具型宗教の典型はキリスト教カルヴィニズムに求められる。そこでは、俗なる人間は超越的人格神に対する祈りという宗教実践によって、そして最終的には神の恩寵によって救われようとするものである。

ヒンドゥー教にあって、バクティといわれるものは、超越的人格神の恩寵による救済を標榜する道具型宗教において、俗なる人間が聖なるものによって救われるために行なう宗教実践である。他の宗教を例にとるならば、キリスト教における神への祈り、またアミダ信仰における念仏<sup>(2)</sup>に相当するもので、それを嘉した神が恩寵を施与し俗なる人間を救済する、そのようなものとして考えられるのである。典型的には道具型に一括されるとしても、キリスト教、念仏道、バクティ道がその神学的背景を異にすることによってそれぞれ豊かな宗教世界を形成しているように、救済手段に関しても三者はそれぞれ異質の宗教実践なのである。相互間の異質性ならず祈り・念仏・バクティそれぞれの中においても複雑な多様性を示している。

「知識」（グノーシス）を救済手段とする器型と「バクティ」を救済手段とする道具型は対極的な二類型である。しかしインドの宗教が聖なるものと俗なるものの本来の同一性を基本的理解としていることを考慮に入れる時、それが器型宗教における聖なるものと俗なるものの在り方であるが故に、バクティを救済手段とする道具型宗教は絶えず器型宗教との比較において、即ち器型（シャンカラ）と道具型（カルヴィニズム）との間の揺れの度合によって、バクティを救済手段

とするい・わ・ゆ・る・道具型はその構造的な性格を明らかにしてくる。この「揺れ」という現象は、バクティという道具型の宗教実践がその中に器型の知識（グノーシス）の意味合いをどれだけ、いかに取り込んでいるかによって、器型への揺れ具合が測られた。前稿で取り上げたヴェーダーンタを代表する被限定者不二一元論のラーマヌジャおよび二元論のマドヴァは、ともにバクティと知識の相克のなかで、それぞれの神学を打ち立てたのである。このことはとりも直さず、バクティが主潮となっていくヒンドゥーの宗教世界にあっても、ウパニシャッド以来の知識（グノーシス）の伝統がその影響力を保っていることを示している。

本稿で取り上げるマドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī) はジャンカラの学系に属する学匠である。彼は不二一元論の大系の中にバクティを導入し、その不二一元論との融合をはかった人物といわれている<sup>(3)</sup>。筆者の問題関心は明らかである。前稿においてはラーマヌジャおよびマドヴァのバクティがいかに知識をバクティの中に織り込んでいるかが問題となった。ここでは、不二一元論の立場からマドゥスーダナが、救済手段としての知識（グノーシス）との連関において、バクティをどのようなものとして捉え、器型宗教の中に融和をはかったかが中心課題となる。

## 1. 2

バクティという語は語源的には帰依することあるいは帰依する対象を愛することを意味する動詞根 bhaj の派生語である<sup>(4)</sup>。また、原実博士の精密な用例研究によって、それが「人間的」「情緒的」かつ「崇敬的」意味合いを持っていることが明らかになっている<sup>(5)</sup>。この研究からも知られるように、バクティを捧げる対象との間に人格的關係が結ばれるということは、本稿で言うところの道具型宗教における宗教実践としてのバクティが聖なるものを対象とする時その対象は超越的人格神であることと対応している。

シャーンデルヤとナーラダの2つのバクティースートラが成立するに及んで、バクティの知識との関連性が否定される傾向が強まり<sup>(6)</sup>、最高神に対する愛情 (anurakti) の側面が強調されるようになった。そして、バクティの道が一部の宗教的エリートにのみ可能な救済手段ではなく、万人に開かれた救済手段であることが強調されるようになった。特にクリシュナ崇拜に顕著であるが、救済手段としてのバクティではありながらも、その崇敬的側面よりもむしろ情緒的側面、ひいては性愛的ニュアンスさえも表面化してきた。

## 2. 1

マドゥスーダナ・サラスヴァティーは1500年頃にベルガルに出た学匠である。多数の著作が彼に帰せられているが<sup>(7)</sup>、彼の名を不朽にしたのは大著『アドヴァイタ・シッディ』である。これは不二一元論学派の中で四大シッディ文学の一つに数えられ、同派を代表する書に数えられている。また彼が不二一元論学派の伝統の中に、はじめてバクティの概念を受容したことに画期的な意義を認める学者もいる。彼が不二一元論学派の伝統の上に立ちながらもバクティについて発言

するに及んだのは、すべからく彼が生きた時代・状況の故であると思われる。即ち彼の生きた16世紀という時代、ベンガルという土地においては、ヴィシュヌ系のバクティ運動およびそれと類似点の多いイスラム教スーフィズムの影響力が大であり、こういった思想界にあって、バクティを無視することが不可能であったようである。この間の事情については前田博士が簡潔に叙述しておられる<sup>(8)</sup>。

ダスグプタはマドゥスーダナに闡説して、彼は哲学的には不二一元論者であるが、宗教的には有神論者でバクティの道を奉ずる者であった、と述べている<sup>(9)</sup>。「哲学的」「宗教的」と区別することによって、本来相い容れない不二一元論とバクティを並記している。これについて前田博士は「不二一元論と信愛の道を融合させた最初の人であるとも言われている。」<sup>(10)</sup>と一歩踏み込んだ思想的評価を与えておられる。

周知の通り、不二一元論学派は創始者シャンカラ以後において、パーマティー学派とヴィヴァラナ学派に分派し、種々の形而上学的問題について互いに異なった理論の展開を見せている。スレーシュヴァラはシャンカラの直弟子の一人であるが、その所論は上記いずれの学派にも受け継がれず独自の立場を守っている。しかし評註作者 (Vārttikakāra) として、不二一元論学史史上重要な役割を荷っている<sup>(11)</sup>。そしてマドゥスーダナは不二一元論についてはこのスレーシュヴァラの所説に従っているのである。このことは彼の『ヴェーダーンタカルパラティカー』<sup>(12)</sup>の冒頭において「この書はヴィヤーサ、シャンカラ、スレーシュヴァラによって示された趣旨を明らかにせんがために……」と自らの思想的系譜を明らかにしていること、またGDの各箇所において<sup>(13)</sup>、スレーシュヴァラの『ブリハドアーラヌヤカ・ウパニシャッド』に対する『評註』を引用し、それを根拠にして自説の正しいことを主張していることなどから知られる。

以上のことを念頭に置き、マドゥスーダナの所説を、①不二一元論学匠としての彼の救済観、②それにバクティがいかに反映しているか、③彼にとってバクティはいかなるものであったか、といった点を中心にして検討することにした。

### 3. 1

マドゥスーダナ・サラスヴァティーは、GDの序、そしてこの序ほど詳細にはないがGD 3.1, 6.43等<sup>(14)</sup>において、救済への階梯について論じている。これはスレーシュヴァラが『ナイシユカルムヤシッディ』等<sup>(15)</sup>において論述している救済への階梯論と一定限の対応を見せている。これは前述のマドゥスーダナがスレーシュヴァラの学系に属したと無関係ではない。そこで、スレーシュヴァラとマドゥスーダナの階梯論を比較してその異同を確認した後に、マドゥスーダナがこの階梯論の中で、バクティをどのようなものとして扱っているかについて探ってみた。

スレーシュヴァラの階梯論については、他の機会に詳述したので<sup>(16)</sup>、次下に列挙するに留める。

- ① nityakarmānuṣṭhāna 不断祭（応時祭）の実行
  - ② dharmotpatti 善行の生起
  - ③ pāpahāni 悪の滅
  - ④ cittaśuddhi 心の浄化〔ジャンカラに同じ〕
  - ⑤ saṃsārayāthātmyāvabodha 輪廻の真相の覚知〔ジャンカラによれば nityānityavastuviveka 恒常のものと無常のものとの識別知〕
  - ⑥ vairāgya 離欲〔ジャンカラによれば ihāmutrārthaphalabhogavirāga 現世と来世に於る富の果報の享受の捨離〕
  - ⑦ mumukṣutva 救済を希求する心〔ジャンカラに同じ〕
  - ⑧ tadupāyaparyeṣaṇa そ(救済)の手段の探求
  - ⑨ sarvakarmatatsādhanaśaṃnyāsa 一切の行為とその手段の捨棄
  - ⑩ yogābhyāsa ヨーガの実習〔ジャンカラによれば śamadamādisādhanaśampat 寂静, 自制等の手段の獲得〕
  - ⑪ cittasya pratyakpravaṇatā 心の内的沈潜
  - ⑫ tattvamasyādivākyaṛthaparijñāna 「汝はそれなり」等の文意の理解
  - ⑬ avidyoccheda 無明の滅〔生前解脱 jīvanmukti〕
  - ⑭ svātmany evāvasthānam 自己のアートマンに安住〔離身解脱 videhamukti〕
- 一方、マドゥッスーダナの階梯は以下の如くである。〔GD 序に依る。〕
- ① niṣkāmakarmānuṣṭhāna 義務的行為の実行〔スレーシュヴァラの①〕
  - ② paramo dharmah 最高善〔スレーシュヴァラの②〕
  - ③ japastutyādikam hareḥ ヴィシュヌ神のジャパ, 称賛等
  - ④ kṣīnapāpa 悪の消滅〔スレーシュヴァラの③〕
  - ⑤ cittasya viveke योगyātā 心の識別知への適合〔スレーシュヴァラの④〕
  - ⑥ nityānityaviveka 〔スレーシュヴァラの⑤〕
  - ⑦ ihāmutrārthavairāgya/Vaśīkara ヴァシーカラと呼ばれる現世来世に於る利益の離欲〔スレーシュヴァラの⑥〕
  - ⑧ śamadamādisāmpatti 寂静, 自制等の手段の獲得
  - ⑨ śaṃnyāsa/sarvaparitṛyāga 一切の放棄
  - ⑩ mumukṣā 〔スレーシュヴァラの⑦〕
  - ⑪ gurūpasadanam upadeśagraha 師に侍座し, その教えを理解すること
  - ⑫ vedāntāśravaṇādikam ウパニシャッドの聴聞等
  - ⑬ tatparipākeṇa nididhyāsanaśiṣṭhatā その完遂によって瞑想に止住すること
  - ⑭ vākyaṭ tattvamati(jñāna) 聖句より真理の知識/śabdāt sāksātkāro nirvikalpaḥ 聖典より無分別の証得〔の生起〕
  - ⑮ avidyāvinivṛtti 無明の消滅〔スレーシュヴァラの⑬, 即ち生前解脱の境位〕

以下についてはスレーシュヴァラが第15階梯を置くのみであるが、マドゥスーダナは生前解脱の諸相として⑦に経るまで幾多の階梯を設けている<sup>(17)</sup>。この両者の驚ろくべき類似性が一見して理解できるが、このことからマドゥスーダナの救済への階梯がスレーシュヴァラのそれを規範として案出されたものであることが充分推測される。スレーシュヴァラが直弟子としてシャンカラの所論を忠実に展開した人物であることを考えると<sup>(18)</sup>、マドゥスーダナはその救済観についてはシャンカラにはじまる不二一元論学派の伝統を厳格に保持していたと言えよう。

### 3. 2. 1. 1

上記マドゥスーダナの階梯論は GD 序の第12偈より第29偈に展開されているが、それに続く第30～39偈において、諸階梯とバクティとの関係が述べられている。

バクティはある階梯から次の階梯へ滞りなく導くものであり、それがなければ多くの障害が立ちはだかり、階梯を昇ることは不可能となる<sup>(19)</sup>。たとえ過去世にバクティの実行による神の恩恵に与かっていようと、間断なきバクティの実行がされなければ、階梯の上昇はおぼつかない<sup>(20)</sup>。このようにバクティは救済へ向っての幾多の階梯を昇っていくのを助ける、否、促進させる力と考えられている。身口意を動員してのバクティの行為はこの意味で救済への最も有効な動力因とされるのである<sup>(21)</sup>。最高のバクタ（バクティを捧げる者）とは、知識に到達し、絶えず絶対者と一如であり、神に一点に集中したバクティを捧げる者である<sup>(22)</sup>。この意味で、愛 (prema) をもてるバクティが最上の救済への手段 (mukhya) と言われるのである。

### 3. 2. 1. 2

そもそも、救済への階梯論は、俗なる人間が自らの歩みによって聖なるものに至ろう、成ろうとする場合に起るものである。阿羅漢に至るために、気の遠くなるほどの多くの階梯を定めた部派仏教に如実に見られるように階梯論は器型宗教における個人的宗教実践、即ち救済手段、の典型的在り方である。この意味でシャンカラ、スレーシュヴァラおよびマドゥスーダナの不二一元論学派は、救済手段の在り方においても器型宗教の典型を示している。ここにバクティの有用性を探ろうとしたマドゥスーダナは、上記のように自力の道を促進させる力としてのみバクティを取り上げることができた。しかしバクティの本来的な道具型におけるそれ、即ち人格神を嘉させその恩寵による救済を求める行為、の意味合いがほとんど消失したものとなった。バクティは俗なるものが行なう宗教実践の、いわば補完的存在として考えられていたのである。

### 3. 2. 1. 3

マドゥスーダナはバクティという語が具体的に意味する行為について、BhP 7. 5. 23-24を引用して、9種の行為を挙げている。即ち① śravaṇa 聴聞、② kīrtana 称揚、③ smaraṇa 想起、④ pādasevana 足下への敬拝、⑤ arcana 崇拝、⑥ vandana 敬仰、⑦ dāsyā (神への) 奉仕、⑧ sakhyā 交友 ⑨ ātmanivedana アートマンへの帰依、である<sup>(23)</sup>。そしてこれら9種のバクティ、

いわゆる尊崇行為は手段としてのバクティ (sādhana bhakti) といわれる。

### 3. 2. 1. 4

器型宗教の枠内において、器型宗教の聖なるものに至ろうとする宗教実践を補完するものとして、その独自の概念内容を持たなかったバクティは、その有様を BhR に見る限り BhP から借用したものであった。BhP のバクティ観については他の機会に詳細に検討する予定であるが、ここでは BhR との連関においてその顕著な点について見ることにする。マドゥスーダナは BhR 1.34-36においてバクティの11の階梯について叙述している<sup>(24)</sup>。これは BhP 3.25.25に基づいたもので<sup>(25)</sup>、彼の創案になるものではない。この11の階梯のうち第1～4階梯は第5階梯 raty-ānkurotpatti「愛の種子の生起」といわれるバクティの達成のための手段 (sādhana) と考えられている<sup>(26)</sup>。

この第5階梯のバクティは BhR 1.3<sup>(27)</sup>におけるバクティの定義に他ならないが、これもまた BhP 2.29.11-12に負っているのである<sup>(28)</sup>。

以上のようなバクティに関する事項、即ち(1)バクティは9種の実行行為から成るいわゆる sādhana bhakti をその内容とする、(2)バクティには11の階梯が看取される、(3)バクティは神への不断の心の働きであるとの定義についていずれも BhP の叙述を踏襲したものである。

マドゥスーダナがGDにおいて(7.16, 18.66等)、バクティに関する詳論は BhR においてなされていると言明していることから、その BhR でのこのような記述を如何に評価すべきかが問題となるところである。上記の通りマドゥスーダナの解脱階梯論においてバクティの果たした役割というのは、俗なるものの個人的宗教実践による救済、即ち器型宗教の枠を越えたものではなかった。あえてその枠内においてバクティの存在意義を求めるとすれば、道具型宗教において考えられていたようなバクティでなく、何らかの独自性が不可欠となる。しかし、ラーマーヌジャあるいはマドヴァが知識との連関においてバクティを把えようとしたのに対し、それどころかバクティに知識の意味合いすら認めず BhP のバクティをそのまま受け入れたということは、彼らより一層道具型におけるバクティの概念を保持していたと考えざるをえない。

### 3. 2. 2. 1

また、マドゥスーダナはGDの他処における叙述からバクティに別の評価を与えているようである。すなわち先に述べたマドゥスーダナの階梯論中の第12～14階梯との関連において、バクティを特定化した概念内容で以て用いているのである。

GD 18.55においてマドゥスーダナは「……nididhyāsana (瞑想) を本質とするバクティによって……」と述べている。第12～14階梯である「ウパニシャッド聖句の聴聞・思索」→「瞑想」→「真の知識」→「無明の消滅」の次第は、GD 11.54では同様に「聴聞・思索・瞑想の完遂」→「自性の証得」→「無明の滅」<sup>(29)</sup>と説かれている。そして、聴聞、思索、瞑想の三者の関係について、瞑想は、「聴聞、思索」の「完遂」したもの (GD 序) あるいは二者の「繰り返しの果

(abbyāsaphala GD 18, 54) であると述べている。この生前解脱の境位、即ち真の知識の開示と無明の消滅、の直前の階梯である nididhyāsana (瞑想) をバクティと同置しているのである。

このようなものとしてバクティを理解することによって、バクティは「それがなければ救済は達成されえない」ような不可欠の手段と成り得たし、また瞑想 (nididhyāsana) が不二一元論学派において確立しているものであるが故に、本来の器型宗教の枠内において処理され得ることとなったのである。

#### 4. 1

マドゥスーダナ・サラスヴァティーは、自らの置かれた時代・状況を反映して、その不二一元論学説の中にバクティの概念を導入した。彼にとってのバクティは知識との関わりにおいて把えられたものではなかった。道具型宗教を志向する立場から「知識」に対処したラーマーヌジャ、マドヴァとは異なり、器型宗教の立場から「バクティ」を把え直そうとしたマドゥスーダナは、知識との関わりを離れたところで、既成の器型宗教の神学に迎合する形でバクティが歪曲化された。救済の階梯を補完するものとして、あるいは瞑想 (nididhyāsana) と同じものとしてバクティは考えられたのである。マドゥスーダナがバクティの意義を正当に考慮したならば、器型宗教の典型である不二一元論は破綻をきたしたであろう。あくまで付加的なものとして不二一元論のなかにバクティは取り込まれたと考えられる。

マドゥスーダナはバクティの内容を語る際には、特に BhR の叙述に顕著に見られるのであるが、BhP の大なる影響下にある。[この点に関する詳細な検討は他日を期したい。] バクティの圧倒的に優勢な時代・状況の中で、バクティの意義を正しく消化し得ず、その結果自己の教説に反映し切っていないことが、以上の二点から推測される。

マドゥスーダナ以後、バクティの影響力は拡大する一方で、現代の不二一元論派の法主ジャグットグルに至っては、「神を信愛 (bhakti) し、それによって神の恩寵が得られ、それによって知識 (jñāna) が授けられる。」<sup>(30)</sup> と述べている。ここにおいては、全く道具型宗教の構造を呈しているといわざるを得ない。即ち、救済手段はバクティで神の恩寵によって救われるとしているのであるから。救いの状態を知識と呼んでいるところに伝統的不二一元論の痕跡が残っているにすぎないのである。

#### 脚 注

[略号]

BhP Bhāgavatapurāṇa (*Śrīmad Bhāgavata Mahāpurāṇa*. 2 vols., Gorakhpur: the Gita Press, 1971).

BhR Bhaktirasāyana (*Śrībhagavadbhaktirasāyana*. Varanasi: Girijēśa Kumāra Paṇḍeya, 2033).

GD Gūḍhārthadīpikā (*Śrīmadbhagavadgītā with the commentaries Śrīmat-Sāṅkarabhāṣya with Ānandagiri; Nilakanṭhi; Bhāṣyotkarṣadīpikā of Dhanapati; Śrīdhari; Gītārthasaṅgraha of Abhinavaguptāchārya; and Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍhārthattattvāloka of Śrīdharmadatta-*

śarmā. Bombay: Nirnaya Sagar Press, 1936).

- (1) (*Samḥāṣā* 5 名古屋大学印度仏教学研究会, 昭 58)。
- (2) R. Otto *India's Religion of Grace and Christianity Compared and Contrasted*. (tr. by F.H. Foster) New York: The Macmillan Company, 1930) pp. 18ff.
- (3) 前田専学『ヴェーダーンタの哲学——シャンカラを中心にして——』〔サーラ叢書24〕(平楽寺書店, 1980) p. 49。
- (4) M. ヘーダエートゥッラ (宮元啓一訳)『中世インドの神秘思想ヒンドゥー・ムリスム交流史』〔人間科学叢書2〕(刀水書房, 1981) p. 82。
- (5) 原実「Bhakti 研究」(『日本仏教学会年報』28号, 1963)。
- (6) 宮元前掲訳(4) pp.86-87参照。
- (7) S. Dasgupta. *A History of Indian Philosophy*. vol. 2, (London: Cambridge University Press, 1973) p. 225; R.D. Karmarkar. *Vedāntakalpalatikā*. [Post-Graduate and Research Department Series No. 3] (Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962) pp. xiii-xiv.
- (8) 「十六世紀における不二一元論の変容——Madhusūdana Sarasvatī を中心として——」『田村芳朗博士 還暦記念論集 仏教教理の研究』(春秋社, 昭57) pp. 467-472。
- (9) S. Dasgupta 前掲書(7) p.226。
- (10) 註(3)に同じ。
- (11) Shoun Hino. *Sureśvara's Vārtika on Yājñavalkya-Maitreyī Dialogue*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1982。
- (12) *Vedāntakalpalatikā* 前掲書(7) p.2。
- (13) GD 2.40; 3.21, 37; 12.20; 18.2等。また BhR 1.23 (p.56) をも参照。
- (14) GD 7.3 他。
- (15) *Bṛhadāraṇyakoṇiṣadbhāṣyavārttika* 2.4. 2-5。
- (16) Shoun Hino. "An Observation on Sureśvara's Vārtika 2-5 of Yājñavalkya-Maitreyī Dialogue (BU 2.4)," *CASS Studies Number 5* (Poona: University of Poona, 1980)
- (17) 第16階梯以下を列挙すれば以下の通りである。第16階梯 (16と記す。以下同じ。) bhramasaṃśayau kṣiyete (17) anārabdāni karmāṇi naśyanti/āgāmīni na jāyante (18) prārabdhakarmavikṣepād vāsanā na naśyati (19) samyamenaopasāmyati (20) īśvarapraṇidhānāt samādhi (21) manonāśo vāsanākṣaya eva ca (22) tritayābhyāsaj jīvanmukti [tritaya=tattvajñāna, manonāśa, vāsanākṣaya] (23) savikalpasamādhi (24) nirvikalpasamādhi (25) brahmavādin (26) sthitaprajño viṣṇubhaktāś ca (27) jīvanmukta ātmaratis. GD 6.43においてストゥサーダナは救済への7階梯と称して類似の階梯論を展開している。第1 sādhanacatuṣṭaya (⑥~⑩に相当), 第2 gurum upasṛtya vedāntavākyavicāraṇātmikā śravaṇamananasampad (⑪~⑫に相当), 第3 nididhyāsanasampad (⑬に相当), 第4 tattvasākṣātkāra (⑭に相当) そして第5~7階梯については jīvanmuktiの antarbheda と規定しているのである。
- (18) 前掲書(11)参照。
- (19) pūrva-bhūmau kṛtā bhaktir uttarāṃ bhūmim ānayet/  
anyathā vighna-bāhulyāt phala-siddhiḥ sudurlabhā //33//
- (20) na taṃ prati kṛtārthatvāc chāstram ārabdhum iṣyate/  
prāk siddha-sāadhanābhyāsād durjñeyā bhagavat kṛpā //35//  
evaṃ prāgbhūmi-siddhāv apy uttarottara-bhūmaye/  
vidheyā bhagavad-bhaktis tāṃ vinā sā na sidhyati //36//
- (21) ityādi-śrutimānena kāyena manasā girā/  
sarvāvasthāsu bhagavad-bhaktir atropayujyate //31//
- (22) teṣāṃ jñāni nitya-yukta eka-bhaktir viśiṣyate/



- ityādi-vacanāt prema-bhaktō 'yaṃ mukhya ucyate //39//
- 23 śravaṇaṃ kīrtanaṃ viṣṇoḥ smaraṇaṃ pāda-sevanam/  
 arcanaṃ vandanam dāsyam sakhyam ātma-nivedanam//  
 尚、この一節は BhRT (同著書の BhR に対する ṭikā) p.108および GD 9.14 (p.424) で言及されて  
 いる。
- 24 prathamam mahatām sevā tad-dayāpatratā tataḥ/  
 śraddhā 'tha teṣāṃ dharmeṣu tato hari-guṇa-śrutiḥ //34//  
 tato raty-ānkurotpattiḥ svarūpādhigatis tataḥ/  
 prema-vṛddhiḥ parānande tasyātha sphuraṇaṃ tataḥ //35//  
 bhagavad-dharma-niṣṭhā 'tas svamiṃs tad-guṇa-śālita/  
 preṃṇo 'tha paramā kāṣṭhety uditā bhakti-bhūmikāḥ //36//
- 25 satām prasaṅgān mama vīrya-saṃvido bhavanti hṛt-karṇa-rasāyanāḥ kathāḥ/  
 taj-joṣaṇādāśv apavarga-vartmani śraddhā ratir bhaktir anukramiṣyati//
- 26 BhRT (p.115): etac-catuṣṭayaṃ sādhanam eva/  
 27 drutasya bhagavad-dharmād dhārāvāhikatām gatā/  
 sarveṣe manaso vṛttir bhaktir ity abhidhiyate//
- 28 mad-guṇa-śrutimātreṇa mayi sarva-guhāśaye/  
 manogatir avicchinnā yathā gaṅgāmbhaso 'mbudhau //11//  
 lakṣaṇaṃ bhakti-yogasya nirguṇasya hy udāhṛtam/  
 ahaitukya-vyavahitā yā bhaktiḥ puruṣottame //12//
- 29 GD 18.54(p.741) 参照。
- 30 前田前掲論文(8) p.473, および同論文に引用の同著者「不二一元論学派における儀礼否定の論理」  
 (『日本仏教学会年報』第43号, 昭52) 参照。